

# 中国語発音学習における日本漢字音活用の可能性について

中澤信幸\*

## Possibility to Apply Japanese *Kanji* Characters' Pronunciation to the Education of Chinese Pronunciation

Nobuyuki NAKAZAWA

### Abstract

It is known that Japanese *kanji* characters originate from the Chinese language. But modern Chinese pronunciation is quite different from Japanese *kanji* characters' pronunciation. Therefore it is the cause of some difficulties for both, Japanese who learn the Chinese language and Chinese who learn the Japanese language. But because modern Chinese pronunciation and Japanese *kanji* characters' pronunciation have something in common, we can put them to practical use.

For Japanese students the distinction between /-ng/ and /-n/ is very difficult. And so I create new theories from the structure and history of Chinese characters.

- When the end of a modern Japanese *kanji* characters' pronunciation is /-u/(/i/) in *kan-on* and *go-on*, and is /-n/ in *to-in*, the end of that modern Chinese characters' pronunciation is always /-ng/.
- When the end of a modern Japanese *kanji* characters' pronunciation is /-n/ in *kan-on go-on* and *to-in*, the end of that modern Chinese characters' pronunciation is always /-n/.

This is a very simple fact, but this is a very important theory to apply to the education of Chinese pronunciation.

Key words: Modern Chinese pronunciation, Japanese *kanji* characters' pronunciation, /-ng/ pronunciation, education of pronunciation, history of Chinese characters

### 0 はじめに

日本の漢字が中国語起源であることは周知の事実であるが、現代中国語の発音は日本漢字音とは大きく異なる。それが日本人中国語学習者・中国人日本語学習者双方にとって壁となっている。しかしながら現代中国語音と日本漢字音には共通する部分もあり、これを互いの発音学習に生かすことも可能であろう。本稿は漢字音の仕組みと歴史的変遷をもとに、現代中国語発音学習における日本漢字音活用の可能性について考察するものである。

### 1 中国語発音学習の問題点

日本人が中国語を学習する時に、漢字の存在はその意味を理解する上で大きな助けとなる。しかしながら、同じ文字でありながら発音が大きく異なるために、日本人にとっては中国語の発音の習得は大きな壁ともなっている。特に日本語と中国語で音韻構造が異なる部分において、この傾向は顕著である。

#### 1.1 音韻構造の違い

例えば子音については、日本語の「清濁（無声音／有声音）」の区別と中国語の「有気音／無気音」の区別

が問題となる。すなわち日本語の「カ行／ガ行」「サ行／ザ行」「タ行／ダ行」といった「清濁」の区別は、音声学的には「無声音／有声音」の区別に起因する。国際音声記号（International Phonetic Alphabet, IPA）で表すと、それぞれ[k-]／[g-]、[s-]／[z-]、[t-]／[d-]となる。（「ハ行／バ行／パ行」については、「パ行＝無声音／バ行＝有声音」（[p-]／[b-]）の関係となる。これは歴史的な音韻変化の結果である。）一方中国語の子音にはこの「無声音／有声音」の区別は存在せず、代わりに「有気音／無気音」の区別が存在する。「胖（pàng）」（太っている）と「棒（bàng）」（すばらしい）のピンイン（拼音）「p-」／「b-」は、それぞれ「有気音」／「無気音」を表している。これらはIPAではそれぞれ[p<sup>h</sup>-]／[p-]と表される。

この子音における音韻構造の違いが、日本人中国語学習者、また中国人日本語学習者を惑わせることになる。すなわち中国語の「有気音／無気音」を、日本人は日本語の「清音（無声音）／濁音（有声音）」と混同してしまうのである。（ピンインで有気音を「k-」「t-」「p-」、無気音を「g-」「d-」「b-」で表していることも、混乱の一因となっている。）逆に中国人も日本語の「清音（無声音）／濁音（有声音）」を、中国語の「有気音／無気音」と混同してしまうのである<sup>1</sup>。

これらの違いは、当然学習時には重点的にトレーニングされる。それにも関わらず、日本人は実際に「有気音／無気音」の発音を使い分けしているつもりでも、中国語母語話者には混同しているように聞こえてしまう。また中国語母語話者が自然に「有気音／無気音」の発音を使い分けしているのも、日本人には聞き分けることができない。逆に中国人日本語学習者も「清濁」の発音を使い分けしているつもりなのだが、日本語母語話者には混同しているように聞こえてしまう。また日本語母語話者が「清濁」を自然に使い分けしているのも、中国人には聞き分けることができない。これらの使い分け、聞き分けに関する確かな理論はいまだに存在せず、学習者の勘と慣れに頼らざるを得ないのが実情である。

## 1.2 ng 韻尾と-n 韻尾

「有気音／無気音」の区別とともに日本人中国語学習者を惑わせるのが、韻尾の区別である。特に「-ng／-n」の区別は日本人にとっては大きな壁となっている。例えば「興（xīng）」（興る）と「新（xīn）」（新しい）は韻尾「-ng／-n」の違いであるが、これらの発音を日本人は使い分けることもできなければ、母語話者の発音を聞き分けることもできない。ちなみに日本漢字音では「興」は「キョウ／コウ」、「新」は「シン」と発音する。これらの違いは、中国語音と日本漢字音の歴史的変遷の結果から生じたものである。

本稿では主にこの-ng 韻尾と、それをめぐる発音の区別について取り上げていくことにする。そして日本漢字音からの類推により、中国語音の使い分け・聞き分けができないかどうか考察することにする。

## 2 中国語音と日本漢字音との関係

日本の漢字はもともと中国語起源であり、日本漢字音も当然中国語音がもとになっている。しかしながら現代中国語音と日本漢字音は、まったくと言っていいほど違う発音となっている。先にも述べたように、これらの違いはそれぞれの歴史的変遷の結果から生じたものである。

### 2.1 中国語音の変遷と日本漢字音

中国語音は古代から現代まで絶え間なく変遷を続けてきたが、その中から数度に渡って日本へ漢字音が輸入されることになる。

日本漢字音は主に「呉音」「漢音」「唐音（トウイン）」に分けられる。そのうち呉音はもっとも古い時代（漢字伝来と同時期か）に輸入されたもので、中国の南方から朝鮮半島を経由して来たものとされている。呉音は「和音」とも呼ばれ、主に仏教界で伝えられた。現代でも仏教經典の読誦音は呉音がもとになっている。一方漢音は中国との正式な国交が成ってから、遣隋使・遣唐使等を通して輸入されたものである。当時中国の都があった、長安等北方の発音がもとになっている。日本では古くからの呉音（和音）に対して、正式な発音として「正音」とも呼ばれ、漢籍や漢詩の読書音として伝えられた。唐音は鎌倉時代以降、主に禅宗の僧たちによって随時輸入されたもので、「宋音（ソウイン）」とも呼ばれる。禅宗の世界で使われたものの、呉音・漢音の存在もあり、個別語彙レベルでの普及に留まった。

例えば「行」という字の呉音は「ギョウ」、漢音は「コウ」、唐音（宋音）は「アン」である。

### 2.2 -ng 韻尾をめぐる歴史的経緯

#### 2.2.1 中国側の変遷過程

中国では『切韻』（隋・陸法言撰、601年）の枠組みが科挙等において押韻の規範とされた。また『切

韻』以後さまざまな『切韻』系韻書が編纂されたが、この集大成が『大宋重修広韻』（『広韻』、宋・陳彭年等編、1008年）である。『切韻』系韻書では韻は細かく分けられ、『広韻』では206の韻目が立てられる。これら中国語中古音の枠組みは、現代の中国語音韻史研究でも盛んに用いられている。

中国語中古音では韻尾は/-uŋ/, /-ŋ/, /-u/, /-n/, /-m/等に分類される<sup>2</sup>。このうち/-m/韻尾は、明代末までに/-n/韻尾に合流して消滅している<sup>3</sup>。従って現代中国語音では/-m/韻尾は存在しない。

中国音韻学では、韻尾によって撰（韻撰、十六撰）に分けて論じることが多い。先に挙げた韻尾の場合、/-uŋ/には「通撰」と「江撰」、/-ŋ/には「宕撰」「梗撰」および「曾撰」、/-u/には「効撰」と「流撰」、/-n/には「臻撰」と「山撰」、/-m/には「深撰」と「咸撰」が所属する。本稿でも以後、中国語の韻尾についてはこの撰の分類を用いて説明を進めることにする。

### 2.2.2 日本側の変遷過程

呉音および漢音輸入時には、中国語には/-uŋ/, /-ŋ/, /-u/, /-n/, /-m/の各韻尾が存在した。これらはいずれも日本語（和語）には存在しない音節であり、これらの転写に日本人たちは苦慮してきた。例えば『金光明最勝王経音義』（承暦3年抄、1079）では、/-uŋ/および/-ŋ/韻尾には「一レ」、/-u/韻尾には「一字」、/-n/韻尾には「一>」、/-m/には「一ム」の借字を与えて区別している。また同書では「件レ音字ニハ異也可知之」「件>音ムニハ異也可知之」といった注意書きもなされる。つまり「一レ」（/-uŋ/, /-ŋ/）と「一字」（/-u/）とを混同しないように、また「一>」（/-n/）と「一ム」（/-m/）とを混同しないように注意しているのである。1.2で述べたように、現代日本人にとっては-ng韻尾と-n韻尾の区別が問題になっているのであるが、当時は現代とは問題の枠組みが異なっていることに注意する必要がある。

これは日本語の撥音「ン」の音価の変遷とも関係している。すなわち、撥音は古代には「ン/n/」「ム/m/」「ウ/ŋ/」と一定の音価を持っていたが、やがて今日「ン/N/」で表されるような音価を指定しないものへと変わっていった<sup>4</sup>。そのため、呉音・漢音では/-uŋ/および/-ŋ/韻尾は（/-u/韻尾と同様に）「一ウ」と転写されていたのが、現代では（/-n/韻尾と同様に）「一ン」と転写されるようになっていく。この「一ン」への変化は、鎌倉時代以降の唐音（宋音）に対する転写で既に現れている<sup>5</sup>。そこで「行」（中国語中古音では[ɣaŋ<sup>1</sup>, ɣaŋ<sup>3</sup>])は呉音では「ギョウ」、漢音では「コウ」、唐音では「アン」となるのである。

現代中国語音と日本漢字音との違いは、このような歴史的経緯を抜きには語ることはできない。

## 3 中国語韻尾・日本漢字音韻尾対照表

-ng韻尾をめぐる上記の歴史的経緯を踏まえた上で、これらを中国語発音学習に生かしていく方法を考えることにしよう。

### 3.1 『磨光韻鏡』による対照

本稿ではこれらの歴史的経緯が一目でわかるような一覧表を作ることを提案する。その時に参考になるのが、江戸時代の文雄（もんのう、1700～1763）『磨光韻鏡』（延享元年刊、1744）である。

#### 3.1.1 『磨光韻鏡』について

『磨光韻鏡』は『韻鏡』をもとに、それぞれの掲出字に漢音・呉音・華音（唐音）を注したものである。

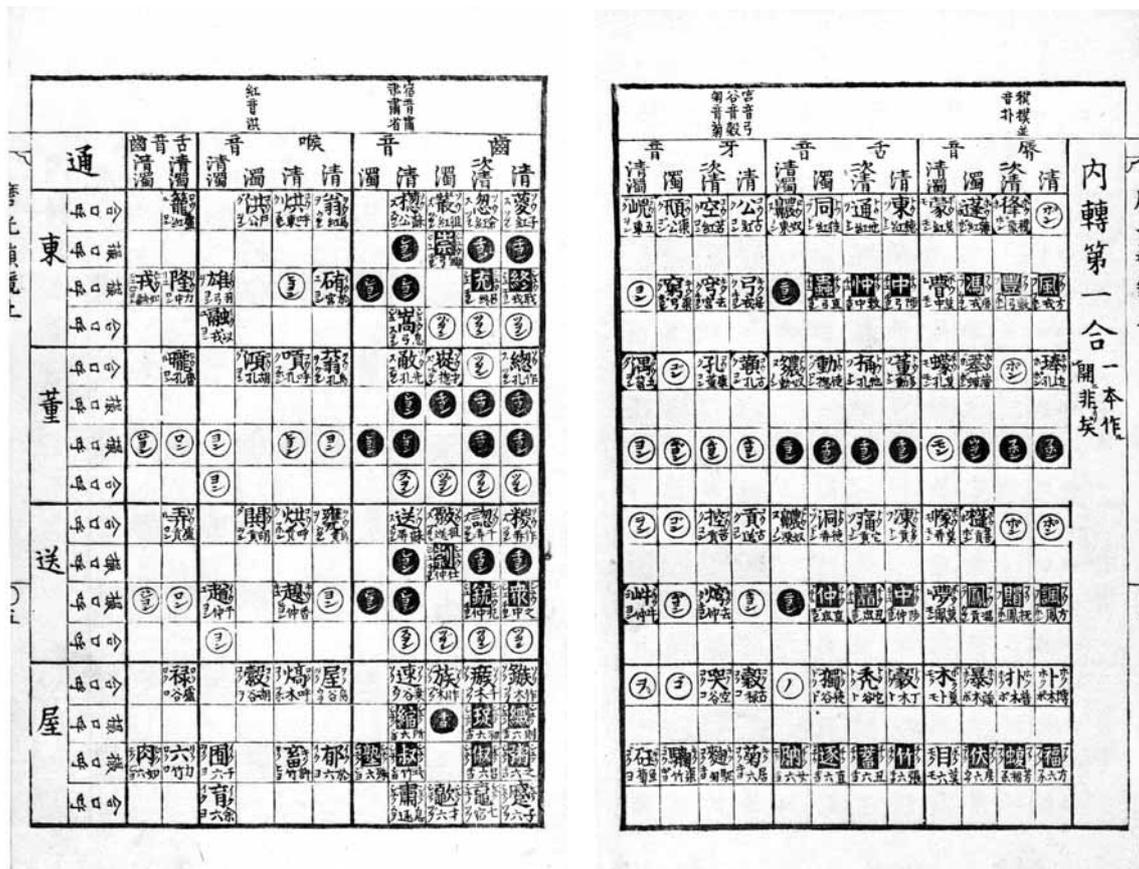
『韻鏡』は『切韻』系韻書の枠組みをもとに、漢字の音を図面にして表したものである。唐末・五代頃に作られたものと推定され、南宋の1161年に張麟之によって刊行されている。日本では信範（1223～1296または1297）によって初めて注釈された。以後『韻鏡』は中国では棄却されてしまったものの、日本では伝えられて大いに注釈がなされた。特に江戸時代に入って出版文化が旺盛になると、『韻鏡』やその注釈書も多岐に渡って出版された。『磨光韻鏡』はそれら注釈書の代表格である。

文雄は『韻鏡』の枠組みや中国語音の知識を用いて、すべての掲出字に漢音・呉音・華音（唐音）を与えた。この方法は本居宣長（1730～1801）『字音仮字用格（じおんかなづかい）』（安永五年刊、1776）にも受け継がれ、現代の漢和辞典も基本的にこの方法ですべての漢字に漢音・呉音を与えている。

この文雄・宣長による「字音仮名遣い」は、過去の文献には見られない漢音・呉音を演繹的に作り出したものとして今日批判されている<sup>6</sup>。とはいえ、すべての漢字に字音を与える方法を導き出したという点では、一定の評価を与えても良いものである<sup>7</sup>。

中国語音から日本漢字音を知ろうとする時に、この『磨光韻鏡』は参考になる。ここでは-ng韻尾とそれをめぐる韻尾にしばって見ていくことにしよう。

図1 『磨光韻鏡』内転第一合（勉誠社文庫90による。）



3.1.2 『磨光韻鏡』による各韻尾対照表

以下に『磨光韻鏡』における「通撰」「江撰」(/-u/)、「宕撰」「梗撰」「曾撰」(/-ŋ/)、「効撰」「流撰」(/-u/)、「臻撰」「山撰」(/-n/)、「深撰」「咸撰」(/-m/) について、その韻尾を一覧表にして示す。またそれぞれの日本漢字音の特徴について、表の下に述べることにする。

表1 「通撰」「江撰」(/-u /)

撰	転	韻目	仮名 (韻尾)		中古音 (韻尾)	例
			漢音/呉音	華音 (唐音)		
通	1	東 (一等)	-oウ / -o・-u	-oン	-auŋ	東、通、同、空
		東 (三等)	-uウ / -u・-o	-oン・-y oン	-iauŋ	風、豊、中
	2	冬	-oウ / -u	-oン	-auŋ	冬、農
		鍾	-uウ / -u・-o	-oン・-y oン	-iauŋ	重、龍
江	3	江	-aウ / -aウ・-y oウ	-aン・-y aン	-auŋ	邦、江

漢音・呉音の韻尾はウ段 (またはオ段) となっているが、華音では「-ン」となっている。これは 2.2.2 で述べたように、日本側の撥音音価変遷の結果である。

表2 「宕撰」「梗撰」「曾撰」(/- /)

撰	転	韻目	仮名 (韻尾)		中古音 (韻尾)	例
			漢音/呉音	華音 (唐音)		
宕	31	唐 (開口)	-aウ / -aウ	-aン・	-aŋ	當、剛
		陽 (開口)	-aウ・-y aウ /-aウ・-y aウ	-aン・-y aン	-iaŋ	方、長、唱、上
	32	唐 (合口)	-aウ・-w aウ /-aウ・-w aウ	-aン・-w aン	-uaŋ	光、黃

		陽(合口)	- a ウ・- y a ウ / - a ウ	- a ン・- y a ン	-iuɑŋ	狂、王
梗	33	庚(開二)	- a ウ / - y a ウ	- e ン・- i ン	-aŋ	浜、更、行
		庚(清) (開三)	- e イ / - y a ウ	- i ン・- e ン	-iaŋ	病、京、生
		清(開四)	- e イ / - y a ウ	- i ン	-ieŋ	聘、名、清
	34	庚(合二)	- w a ウ / - w a ウ	- o ン・- w o ン	-uaŋ	横
		庚(清) (合三)	- e イ / - y a ウ	- i ン・- y o ン	-iuɑŋ	兄、永
		清(合四)	- e イ / - y a ウ	- i ン	-iueŋ	傾、營
	35	耕(開口)	- a ウ / - y a ウ	- e ン・- i ン	-eŋ	棚、耕、幸
		清	- e イ / - y a ウ	- i ン	-ieŋ	聲、成、令
		青(開口)	- e イ / - y a ウ	- i ン	-eŋ	定、青、零
	36	耕(合口)	- w a ウ / - w a ウ・- y a ウ	- o ン・- w o ン	-ueŋ	宏
		青(合口)	- e イ / - y a ウ	- i ン・- y o ン	-ueŋ	迴
	曾	42	登(開口)	- o ウ / - o ウ	- e ン	-ɑŋ
蒸			- y o ウ / - y o ウ・- o ウ	- i ン	-ieŋ	徵、蒸、興
43		登(合口)	- o ウ / - o ウ	- o ン	-uɑŋ	肱、弘

漢音・呉音の韻尾はウ段（またはイ段）となっているが、華音では「-ン」となっている。これも日本側の撥音音価変遷の結果である。

表3 「効撮」「流撮」(/-u/)

撰	転	韻目	仮名(韻尾)		中古音(韻尾)	例
			漢音/呉音	華音(唐音)		
効	25	豪	- a ウ / - a ウ	- a ウ	-au	到、高、早、好
		肴	- a ウ / - y a ウ	- y a ウ	-au	包、交、教、抄
		宵	- y a ウ / - y a ウ	- y a ウ	-iau	表、朝、沼、療
		蕭	- y a ウ / - y a ウ	- y a ウ	-eu	挑、叫、了
流	37	侯	- o ウ / - u・- o・- y u	- e ウ	-ɬu	頭、口、走、樓
		尤	- u ウ・- o ウ・- i ウ・ - y u ウ / - u・- y u・- o	- u ウ・- e ウ ・- i ウ	-iɬu	不、久、收、休
		幽	- i ウ・- y u / - i・- u・- o・- y u	- i ウ・- e ウ	-ieɬu	謬、糾、秋、由

漢音・呉音・華音ともに、韻尾はウ段（一部はオ段）となっている。

表4 「臻撮」「山撮」(/-n/)

撰	転	韻目	仮名(韻尾)		中古音(韻尾)	例
			漢音/呉音	華音(唐音)		
臻	17	痕	- o ン / - o ン	- e ン	-ɑn	根、眼、恩
		臻	- i ン / - i ン	- i ン	-ien	臻
		真	- i ン / - i ン・- o ン	- i ム	-ien	民、親、因、人
	18	魂	- o ン / - o ン・- a ン・- u ン	- e ン・- o ン ・- u ン	-uɑn	門、困、温、論
		諄	- y u ン・- i ン / - y u ン・- o ン・- i ン	- y u ン	-iuen	春、順、倫
	19	欣	- i ン / - o ン	- i ム	-iɑn	斤、近
20	文	- u ン / - u ン・- o ン	- u ン・- o ン ・- y u ン	-iuɑn	分、文	

山	21	山(開口)	- a ン / - e ン	- a ン・- e ン	-en	間、眼、山
		元(開口)	- e ン / - o ン・- e ン	- o ン	-ian	健、言、軒
		仙(開口)	- e ン / - e ン	- e ン	-ian	便、面、線
	22	山(合口)	- a ン・- w a ン / - a ン・- w a ン・- e ン	- a ン・- w a ン	-uen	頑、幻
		元(合口)	- a ン・- e ン / - o ン・ - a ン・- w a ン・- e ン	- w a ン・- e ン	-iuan	万、券、遠
		仙(合口)	- e ン / - e ン	- e ン	-iuan	全、選、沿
	23	寒	- a ン / - a ン	- a ン	-an	單、難、看、漢
		刪(開口)	- a ン / - a ン・- e ン	- e ン・- a ン	-an	慢、顔
		仙(開口)	- e ン / - e ン	- e ン	-ian	免、乾、彦、連
	24	先(開口)	- e ン / - e ン	- e ン	-en	天、前、賢、見
		桓	- a ン・- w a ン / - a ン・- w a ン	- w a ン	-uan	半、團、玩、算
		刪(合口)	- a ン・- w a ン / - a ン・- w a ン	- a ン・- w a ン	-uan	班、關、慣、撰
仙(合口)		- e ン / - e ン	- e ン	-iuan	轉、權、船、戀	
		先(合口)	- e ン / - e ン	- e ン	-uen	犬、淵

漢音・呉音・華音ともに、韻尾はすべて「-ン」となっている。

表5 「深摂」「咸摂」( /-m/ )

摂	転	韻目	仮名(韻尾)		中古音(韻尾)	例
			漢音/呉音	華音(唐音)		
咸	38	侵	- i ン / - i ン・- o ン	- i ム	-iem	品、金、音、任
		覃	- a ン / - o ン・- a ン	- a ム	-am	探、南、含
	39	咸	- a ン / - a ン	- a ム	-em	陷
		鹽	- e ン / - e ン	- e ム	-iam	炎、染
		添	- e ン / - e ン	- e ム	-em	點、念、嫌
	40	談	- a ン / - a ン	- a ム	-am	談、甘、三
		銜	- a ン / - a ン	- a ム	-am	監、鑑、檻
		嚴	- e ン / - e ン・- o ン	- e ム	-iam	嚴
		鹽	- e ン / - e ン	- e ム	-iam	漸、潛、鹽
	41	凡	- a ン・- e ン / - o ン・- a ン・- e ン	- a ム・- e ム	-iam	凡、炎

漢音・呉音では韻尾は「-ン」となっているが、華音では「-ム」としている。これは『韻鏡』研究の結果による「知識音」(学習音)であると考えられる。

以上の表1~5をまとめると、次の表6のようになる。

表6 『磨光韻鏡』における撥音韻尾

日本漢字音		中国語中古音
漢音・呉音	華音(唐音)	
<b>ウ(イ)</b>	<b>ン</b>	<b>/-u /, /- /</b>
—ウ	—ウ	/-u/
—ン	—ン	/-n/
—ン	—ム	/-m/

以上、江戸時代の『磨光韻鏡』をもとに、中国語中古音韻尾と日本漢字音韻尾とを対照させてきた。これらの対照を現代中国語音と日本漢字音に当てはめると、どうなるであろうか。

### 3.2 現代中国語音・日本漢字音による対照

上記表 6 を、現代日本漢字音と中国語音に置き換えると、次の表 7 のようになる。

表 7 現代日本漢字音の撥音韻尾と中国語音

現代日本漢字音		現代中国語音
漢音・呉音	唐音	
-ウ(-イ)	-ン	-ng
-ン	-ン	-n
-ウ	-ウ	-u, -o

この表 7 の内容について、具体例を以下の表 8~10 に示す。漢音・呉音・唐音は現代の漢和辞典で見られるものを挙げています。ただし唐音はその数が極めて限られているので、やむを得ず『磨光韻鏡』から補っている。(その場合は括弧に入れて示している。)

表 8 -ng グループ

字	摂	韻目	漢音/呉音	唐音	現代中国語音	例
東	通	東(一等)	トウ/ツウ	(トン)	dōng	东西
中		東(三等)	チュウ/チュウ	(チョン)	zhōng, zhòng	中国, 中学
冬		冬	トウ/トウ	(トン)	dōng	冬天, 冬瓜
江	江	江	コウ/コウ	(キヤン)	jiāng	江湖, 江米
方	宕	陽(開口)	ホウ/ホウ	(フワン)	fāng	方向
光		唐(合口)	コウ/コウ	(クワン)	guāng	光景, 光复
行	梗	庚(開二)	コウ/ギョウ	<b>アン</b>	xíng	行李, 自行车
京		庚(開三)	ケイ/キョウ	<b>キン</b>	jīng	北京, 京剧
青		青(開口)	セイ/シヨウ	(ツイン)	qīng	青菜, 青铜
朋	曾	登(開口)	ホウ/ボウ	(ボエン)	péng	朋友
興		蒸	キョウ/コウ	(ヒン)	xīng, xìng	兴起, 高兴

表 9 -n グループ

字	摂	韻目	漢音/呉音	唐音	現代中国語音	例
恩	臻	痕	オン/オン	(エヘン)	ēn	恩爱, 恩人
人		真	ジン/ニン	(ジム)	rén	人民, 日本人
文		文	ブン/モン	(ウワン)	wén	文书, 文法
眼	山	山(開口)	ガン/ゲン	(エン)	yǎn	眼镜, 眼力
便		仙(開口)	ヘン/ベン	(ピエン)	pián, piàn	便宜
船		仙(合口)	セン/ゼン	(ヂュエン)	chuán	上船, 船票
品	深	侵	ヒン/ホン	(ピム)	pǐn	品级, 品行
念	咸	添	ネン/デン	(ネム)	niàn	念头, 念书
三		談	サン/サン	(スアム)	sān	三月, 三明治
凡		凡	ハン/ボン	(ウワム)	fán	凡例, 凡人

表 10 -u グループ

字	摂	韻目	漢音/呉音	唐音	現代中国語音	例
高	効	豪	コウ/コウ	(カウ)	gāo	高兴, 高山
教		肴	キョウ/コウ	(キヤウ)	jiāo, jiào	教育, 教授
了		蕭	リョウ/リョウ	(リヤウ)	liǎo	了解
要		宵	ヨウ/ヨウ	(ヤウ)	yāo, yào	要求, 要点

走		侯	ソウ／ス	(ツエウ)	zǒu	走路
久	流	尤	キュウ／ク	(ギウ)	jiū	好久
秋		幽	シュウ／シュ	(ツイウ)	qiū	秋季, 秋波

この表 8~10 を見ると、日本漢字音・現代中国語音ともに、ある程度中国語中古音の枠組みを受け継いでいることがわかるであろう。

#### 4 まとめと今後の展望

1.2でも述べたように、日本人にとって中国語の「-ng/-n」の区別は大きな壁である。しかし3以降の考察によって、次のような理論を導き出すことが可能となるのである。

- ・ 現代日本漢字音で漢音・呉音が「一ウ」(「一イ」)、唐音が「一ン」となるものは、中国語音では-ng 韻尾となる。
- ・ 現代日本漢字音で漢音・呉音・唐音ともに「一ン」となるものは、中国語音では-n 韻尾となる。

これは極めてシンプルな事実であるが、今後の中国語発音学習に生かせる重要な理論であり、大いに活用すべきものであることを主張しておきたい。

またこの中国語中古音の枠組みや『磨光韻鏡』を利用することで、「-ng/-n」の区別だけでなく、有気音／無気音の区別や各種子音の区別、また母音の区別等を一覧表にすることも可能である。そしてこれらの知識を活用することによって、中国語発音学習そのものが新たな段階へと進む可能性をも指摘して、筆を擱くことにする。

#### 注

- 1 中澤 (2005) 参照。
- 2 中国語中古音の推定音価は三根谷徹説による。三根谷 (1993) 参照。
- 3 李思敬 (1987) p. 68 参照。
- 4 迫野虔徳 (1987) および沼本克明 (1988) 参照。
- 5 湯沢質幸 (1975) 参照。
- 6 沼本克明 (1995) 参照。
- 7 「字音仮名遣い」の意義については、中澤 (2000) および中澤 (2001) で論じたことがある。

#### 引用文献 (五十音順)

- 迫野虔徳 (1987) 中世的撥音 (『國語國文』56-7)
- 中澤信幸 (2000) 漢和辞典の字音について (『人文科学研究』29)
- 中澤信幸 (2001) 〈字音仮名遣い〉の意義について (『日本言語文芸研究』2)
- 中澤信幸 (2005) 台湾人日本語学習者と「清濁」 (『大島商船高等専門学校紀要』38)
- 沼本克明 (1988) 「ン」の通時的変遷 (『日本漢字音の歴史的研究 一體系と表記をめぐって一』所収、汲古書院、1997)
- 沼本克明 (1995) 字音仮名遣いについて (築島裕編『日本漢字音史論輯』、汲古書院)
- 三根谷徹 (1993) 『中古漢語と越南漢字音』(汲古書院)
- 湯沢質幸 (1975) 喉内鼻音韻尾 (『唐音の研究』所収、勉誠社、1987)
- 李 思敬 (1987) 『音韻のはなし 一中国音韻学の基礎知識一』(慶谷壽信・佐藤進編訳、光生館)